『明六雑誌』の語彙構造

― 2 字漢語を中心に（その 1）―

高　野　繁　男

（目　次）

1　はじめに
2　『明六雑誌』の語彙構成
　1）語彙の種別
　2）課題の設定
　3）２字漢語の構成
3　現存語の検討
　A）『明六雑誌』期に新たに造られた語
　B）『明六雑誌』期に中国語から新たに入った語
　　（以上本号）
4 廃語の検討
　A）『明六雑誌』期に新たに造られた語
　B）『明六雑誌』期に中国語から新たに入った語
　C）『日本国語大辞典』に登録されていない語
5　現存語と廃語
　1）既存語の性格
　2）廃語の性格
　3）既存語と廃語の差異
6　おわりに

今回の概略

日本語の語彙は，幕末・明治初期に大幅に更新された。その理由は，開国とともに欧米の文化が短日時に大量に日本にもたらされたことによる。まず，新思想受け入れのためのことば造りが必要であった。

本稿は，『明六雑誌』（1874~75／明治７~8 年）を資料に，明治初期の語彙を検証しょうというものである。資料である『明六雑誌』は，西洋の新思想をいち早く理解した当時の第一級の知識人たちの議論の場であった。ここで，新思想を支えるための多くの語彙が生産された。一つは日本人の手による新語造りであり，二つは洋学の先達であった中国洋学書（西学書）の訓訳をとおして新たな語を取り入れることであった。後者が漢語であるのは当然であるが，前者の日本人による新語造りも日本語本来の和語ではなく，漢語であるところに特色がある。

なお，本稿は２回に分けて掲載する。今回は，資料のうち，この期に日本語に新たに加えられた２字漢語で，現在も使われている語を取り上げた。

1．はじめに

日本語の語彙は，明治の啓蒙期に大幅に更新された。結果から見て，それは欧米諸国の文化を移入する際の造語，また中国からの借用語によるものであった。日本での造語には，英語をはじめとする外国語をベースにした訳語と，そうでない直接の造語があるが，両者とも漢字を造語要素としている点で共通している。一方の借用語は，日本よりひと足先に開国し，英書の翻訳や「英華辞典」をもっていた中国語から新たにことばを借り受けることができた。

ただ，後者の中国語からの借用語は漢語であるのは当然だが，前者の日本人の手による新造の訳語も漢語であるところに近代語の特色がある。それは，漢字のもつ造語力と，カナに置き換るのではなく語で訳すことを原則としていたこと，さらに当時の洋学者の高度な漢学の知識におうところが大きいだろう。これについては，後に〈造語法〉の項でふれる。

ところで，近代語研究に関わる研究者は少なくないが，語彙研究の大部分は辞書の類を資料にしてきた。一方の，直接の翻訳書やそれらを内容とした論文や評論が残されている。辞書の語は，一定の認知を受けているという意味で重要である

が，後者の訳書や著書には公認されないまま消えていった一過性の語も含まれており，これらの語の解明は新語誕生のプロセスや造語の方法を明らかにするのに有意義である。本稿では『明六雑誌』の語彙の構造を明らかにすること，換言すれば近代日本語の成立のプロセスを語彙の更新をとおして探ってみたい。

資料である『明六雑誌』は，日本最初の学術同人「明六社」の機関誌で，1873（明治6年）に，森有礼の主唱により，西周，西村茂樹，津田真道，福沢諭吉，加藤弘之ら，西洋の近代思想，知識をいち早く学んだ当時の第一級の知識人たちが参加した。機関誌『明六雑誌』は，翌年の1874（明治7年）3月に第1号が創刊され，欧米の自由思想による新時代の方向を指示し，民意の高揚をめざす啓蒙活動を展開した。掲載された論文は，文明開化論，国語問題，婦人問題，政治，経済，法律，教育，哲学などの広範におよぶ。また，イギリスの自由思想を基本にした自由民権論を展開し，その実現のための理念や制度を論じた。しかし，政府の言論弾圧により，翌，1875（明治8年）11月，第42号をもって廃刊になった。

『明六雑誌』は，これまでのところ明治初期の啓蒙家たちの思想を知る資料として活用され，近代の記述に貢献してきた。ただ，新しい思想や制度の理解には，述べてきたように，まず新しいことばの獲得，創造が条件であった。『明六雑誌』の主張は，それまでの日本人が持ち合わせていなかったものであった。そうした内容を伝えるための，新しいことばの生産の場ともなった。とくに，この「明六社」が結成された1973（明治6年）前後は，新しいことばが盛んに造られた時期である。とくに，この時期に造られた文系のことばの多くは，その後中国語や朝鮮語にももたらされた。『明六雑誌』は，啓蒙家たちの思想を知る資料としての価値もさることながら，この時代のことばを知るための第一等の資料でもある。

さいわい，一昨年3月『明六雑誌語彙総索引』(註1)を出版することができた。『明六雑誌』全42号より自立語のすべてを延べ語の形式で取り出し，漢語，和語，洋語，混種語，人名，書名，国名，地名に分類し示した。これを資料に論を展開する。

2．『明六雑誌』の語彙構成

1）語彙の種別

『明六雑誌』の語彙は《表1》のようになっている。自立語の総数は，延べ語数7万3,999語，異なり語数1万3,504語である。

語種別に見てみよう

a）漢語

ここでいう漢語は，中国語から借用のものと，日本で造った和製漢語を含む，いわゆる〈字音語〉のことである。漢語の全体に占める割合は，延べ語数で39,385語53.1%（73,999語中）に達する。これが異なり語数になると，さらに占有率が高くなり10,115語74.9%（13,504語）を占め，和語を大きく上回る。このように漢語の率の高いのは『明六雑誌』に収める文章の大部分が評論文であること，文体が漢文訓読体であることなどが指摘できよう。さらに，このことと相まって欧米の思想に触れ，未来の日本の進むべき方向を指示する主張には，旧来の和語より，後に述べる新しく中国洋学（中国では西学）から入った新漢語，そして自分たちの手による新造の漢語で熱っぽく語る結果として漢語が有効であったということであろう。

b）和語

延べ語数は，31,490語で42.6%（73,999語中）だが，これが異なり語数になると16.6%（2,242語）と漢語の4分1以下になる。以前，国立国語

『明六雑誌』語彙一覧 《表 1》

語　種	漢　語	和　語	洋　語	混　種	人　名	書　名	国　名	地　名	総　計
延べ語	39,388	31,490	639	344	832	72	874	360	73,999
	(53.1%)	(42.6%)	(0.9%)	(0.5%)	(1.1%)	(0.1%)	(1.2%)	(0.5%)	100%
異り語	10,115	2,242	380	221	326	34	55	131	13,504
	(74.9%)	(16.6%)	(2.8%)	(1.6%)	(2.4%)	(0.3%)	(0.4%)	(1.0%)	100%

研究所が行った調査『現代雑誌九十種の用字・用字』(註2)の異なり語の割合は，漢語47.5%，和語36.7%である（評論文では，漢語51.8%，和語39.9%で，漢語の割合がさらに高くなる）。『明六雑誌』は，和語が少なく漢語の多い文章ということになる。

c）洋語・混種語

洋語は，異なり語で2.8%（延べ語0.9%）とあまり多くない。洋学者の文章であることを思うと，その感が一層つよい。これは，先に述べたように，当時の西洋語の受け入の原則が語に訳すことにあったからだろう。その点，現在はカタカナに置き換えるだけの音訳の傾向がつよい。

混種語も異なり語で1.6%（延べ語0.5%）とあまり多くない。現在は6％程度で，漢語と洋語の組み合わせが多いが『明六雑誌』では，和語と漢語の複合語が多い。

d）その他

人名・書名・国名などは，本論の目的外であるが，どんな人物，どんな書物を本に論を展開しいるか，論者たちの知識，思想を垣間見ることができる。

2）課題の設定

明治期初期の啓蒙家たちの文章で注目されるのは語彙であること，さらに絞ると漢語がきわだっていることが理解できょう。本稿は，その漢語に焦点を当て，この時期の語彙を究明することにある。

『明六雑誌』に用いられている漢語は《表2》のようになっている。

まず，1字語は新語造成という意味では，今日ではその可能性はない。なぜなら，漢語では1字語が造成要素である〈語基〉(stem)となり，それが組合わさって〈語〉(word)を形成するのが原則だからである。このことは，和語でも単立語が語基となり語を形成する。たとえば，「人」（ヒト）はそれ自体意味をなし単立する。これに「村」（ムラ）が合わさると「村人」となり新たな語が生まれる。この「人」ないし「村」は，今日では新たに造られることはまずない。また，これらの単立語の誕生は確定できないのが普通である。漢語においては1字が原則として意味をなす最小の単位であり，これが組合わさって合成語を形成する。漢語においても和語と同様，この1字語が新たに生まれることはまずないだろう。つまり，1字語は所与として与えられているのである。

2字語は《表2》が示すように漢語全体の83.5%（異なり語）を占める。明治初期の語彙の更新は，大部分がここで行われている。本稿は，この2字漢語を中心に論を進める。

3字以上の漢語も2字語と同様に注目されるが，これらの語は，2字語をベースに造語されるという意味で二次的であるといえる。たとえば，3字語は「弱／電気」「社会／性」というように2字語を語基に，1字語基が前接，あるいは後接する構造になっている。

また，4字語は「電気／工学」「社会／科学」のように2字語を語基に構成される複合語である。5字以上の語も3字語，4字語が組み合わさって造られる。

3）2字漢語の構成

日本人がそれまで体験したことのない未知の西洋の思想，学問，制度などをきわめて性急に短日時に移入しようとしたが，幕末，明治初期の啓蒙期の特色であった。ただ，それには，それまであった既存語だけでは対応できず，西洋文化を理解するには，まず最初に乗り越えなければならないハードルは，それに対応する言語を完備することであった。

『明六雑誌』は，そうした時代の言語の情報を提供してくれる第一等の資料である。前述のように，そのカギは漢語にあること，さらに2字漢語がその主役であこことを確認した。『明六雑誌』から得た

〈漢語〉異なり語の内訳　《表2》

摘　要	1字語	2字語	3字語	4字語	5字以上	合　計
異なり語	753 (7.4%)	8,443 (83.5%)	605 (6.0%)	251 (2.5%)	63 (0.6%)	10,115 (100%)

2字漢語の全数を分析した結果が《表3》である。

〈新語〉と〈既存語〉に大別してある。本論は〈新語〉の検証を課題としているが，ここで〈既存語〉について，ひとことふれておく。ここでいう〈既存語〉とは，日本に古くから渡来していた漢語（和製漢語も含む）のことで，少なくとも日本に近代の英学が入ってくる以前から使われていた語のことである。これらの2字漢語は，いうまでもなく英学の移入に主役的な役割を果たしたが，近代の語彙の更新という意味では，その実質は〈新語〉にある。

すでに述べたように，この〈既存語〉だけでは西洋の新思想の移入のすべては賄いきれず，日本人が英語に精通するまでは，日本より一足先に英学を入れて，ある程度の訳語を確保していた中国洋学から新たな漢語を借用することが行われた。その一方で，日本人の手による造語（和製漢語）も盛んに行われた。この〈新語〉の中には，辞書に登録されることもなく消えていった一過性の語も多数含まれている。

《表3》が示すように〈新語〉(註3)が35.8%と約4割を占めているが，この数字は，この時期の英和辞典『英和字彙』（1873／明治6年）の新語が28.5%であるから多いといえよう。(註4)

A）〈『明六雑誌』期に新たに造られた語〉（近代以前の日中語に用例のない語）は，幕末から『明六雑誌』を含む明治8年までに日本で造られた可能性の高い，少なくとも今のところそう考えられる語である。

B）〈「『明六雑誌』期に中国から新たに入った語」〉（近代以前の日本語に用例のない語）は，中国洋学の訓訳を含め幕末以降に新たに中国語から入った語である。

C）〈『日本国語大辞典』に登録されていない語〉は，国語辞典に登録されることもなく消えていった，本資料の『明六雑誌』にだけに登場した語ということになろう。

こうした〈廃語〉は，このC）項目だけでなく，A）／B）の項にもみられ，全体で1,635語ある。〈新語〉に占める割合は54.0%に及ぶ。造語法の視点から後に取り上げたい。

3．現存語の検討

A）『明六雑誌』期に新たに造られた語（近代以前の日中に用例のない語）

幕末からの洋学の移入に伴い日本人が造語した可能性の高い語で，『明六雑誌』が早い用例と思われ現存語を中心に検討する。

［A-a］〈学術・法律・政治〉に関する語彙

英学　科学　哲学　農学　珪素　砒素　電磁／法案　立憲　など

◆英学

「或人曽テ英公使ノ書記官サトウ氏ニ語テ曰ク英学頗ル日本ニ行ハルトサトウ氏頭掉テ否米学ナリト言ヘリト」（津田真道「西洋ノ開化西行スル説」18号）

日本人が［英学］というのは，実は「米学」だ

2字漢語（異なり語）の新語・既存語の内訳《表3》

分類項目		現存語(%)	廃語(%)	合計(%)
新語	A）「明六雑誌」期に新たに造られた語（近代以前の日中語に用例のない語）	430 (46.0%)	500 (54.0%)	930 (30.8%)
	B）「明六雑誌」期に中国語から新たに入った語（近代以前の日本語に用例のない語）	957 (71.0%)	395 (29.0%)	1,352 (44.7%)
	C）『日本国語大辞典』に登録されていない語	0 0	740 (100%)	740 (24.5%)
	合計	1,387(46.0%)	1,635(54.0)	3,022(35.8%)
既存語			5,421(64.2%)	8,443(100%)

◆「現存語」「廃語」の認定は『岩波国語辞典』（第5版）／『新明解国語辞典』（第5版）／『集英社国語辞典』（第2版）のうち，一冊でも登録していれば「現存語」とした。なお，「新語」「既存語」の認定については〈註4〉を参照のこと。

と述べている。他に「英語」「英人」「英法」が見えるが『大漢和辞典』は［英学］「英語」を見出し語に立てていない。［英学］は，この例が早いものである。「英人」は日中ともに近世に見える。［英法］はここではイギリスとフランスの意味で使われている。中国でも［英学］は，近代の用法だが，日本語での使用は中国語からの借用と考えられる。

◆科学

「然ルニ如此ク学ト術ト□其趣旨ヲ異ニスト雖ドモ然ドモ所謂科学ニ至テハ両相混シテ判然区別ス可ラサル者アリ」（西周「知説」22号）

［科学］は，英語〈science〉の訳語として知られている。〈science〉には「学」「術」「知」，また「学問」「学術」「知識」「理学」などの多くの訳が当てられた。［科学］は西周の造語（訳語）と思われる。この用例が早い。

◆哲学

「欧州哲学上（フイロソフィー）道徳（モラール）ノ論ハ古昔ヨリ種々ノ変化ヲ歴テ今日ニ至リ終始同一撤ニ帰スルコト莫シ（西周「人世三宝説」38号）

［哲学］の初出は，同じく西周の『百一新論』（1874・明治7）とされ『明六雑誌』と同じ時期である。なお，儒学の用語に「希哲学」があり，これを中国洋学が〈philosophy〉の訳語として転用したものが日本語に入り，さらにこれを変形（省略）させて［哲学］とした。

◆農学

「文法学議論学上帝道ノ学人道ノ学律法学政事学等ハ形而上ニ属ス格物学百工諸術ノ学分離学医学農学等ハ形而下ニ属ス（中村正直「百学一班」16号）

『日本国語大辞典』は，明治4年の新聞記事を例示している。古い中国語の用例はなく和製漢語のようである。上記の中村の論文は翻訳である。W. Lobscheid『英華辞典』(1869/明治2年)，『英和字彙』(1873/明治6年)は，ともに〈agriculture〉に「農事」の訳を付けている。先の新聞記事やこの『明六雑誌』の例が早い。

◆珪素

「元素一覧表中（64元素）21番目に［珪素］を挙げる。（清水卯三郎「化学改革の大略22号）

◆砒素

「元素一覧表中（64元素）10番目に［砒素］を挙げる。（同上）

［珪素］［砒素］ともに，今のところ『大漢和辞典』『日本語語大辞典』は用例を示していない。この表には「酸素」窒素」「炭素」「水素」なども含まれているが，これらの語は，江戸の蘭学で，オランダ語の訳語として造られた。本稿では，こうした蘭学の語彙は〈既存語〉に分類した。

◆電磁

「今夫西洋電磁ノ諸術若クハ銀汞写影ノ技ノ如キ若之ヲ秘密ニ付セハ人々ノ驚愕ハタ如何ナルヘキ而シテ之カ理ヲ明カシ‥‥」（西周「秘密説」19号）

タイトルの「秘密」は，西洋から入る科学技術の原理をさす。それを明かすこと，まずことばから始めなければならない。『日本国語大辞典』の「電磁」には用例がない。また，『大漢和辞典』及び，中国の『漢語大詞典』（1993年）は「電磁」を登録していない。

◆法案

「夫レ国家新ニ法ヲ制シ律ヲ定ムル時ハ皇帝相ニ命シ或ハ特任ノ官員ニ命ジテ法案ヲ草セシメ或ハ議員ヨリ法案ヲ奏呈シ‥‥」（津田真道「政論」9号）

◆立憲

「蓋シ若シ他ノ立憲各国ニ於テ巴力門ノ威厳此ノ如ク盛強ニ過ルトキハ殆ト治安ニ害アルヤ」（加藤弘之「国法汎論」の訳文，4号）

［法案］［立憲］ともに，中国語の用例，また日本語の用例もこの例より早いものが今のところ見つからない。和製漢語であろう。

［A-b］〈経済・社会〉に関する語彙

外債　資金　原価　財務／宗教　旧教　教権
教祖　教派　信教　申告　隷従　迷信　官権
夫権　女権　権限　制裁　社交　社則　社名
社用　役員　客員　敬語　入籍　公衆　公認
広告　郵送　対立　占領　暴力　暴論　警護
有事　など

◆外債（→国債）

「外債ノ嵩ミタルハ霄ノ明星ノ一寸見ハレタル

ナリ外人ニ元金ヲ借テ商売スル者アルハ茶碗のカケラヲ見ルガ如シ」(福沢諭吉「内地旅行西先生ノ説ヲ駁ス」26号)

国の経済を憂える論争の中で生まれた語彙か。和製漢語で『明六雑誌』が早い例である。

[国債] も見えるが，この方は中国洋学書『六合叢談』(1857年)，『万国公法』(1864年) に見える。これが日本に入って訓訳された。

◆資金

「‥‥講究ノ際ニ演繹ノ法 (デダクシウン) ト帰納ノ法 (インダクシウン) トヲ用フルニ意ヲ致スヘキコトナリ此二法術ハ譬ヘハ富家ノ子ノ資本金ヲ費ヤスト貧人ノ子ノ資本金ヲ蓄フルトノ差ノ如ク演繹法ハ譬ヘハ百万両ノ資金アリト定メ之ヲ分配区別シ‥‥ (西周「知説四」22号)

この用例より古いものが見あたらない。「資本金」も見える。また，中国語の用例もないので和製漢語であろう。

◆原価

「洋品輸入ノ多キ人民ノ力ニ過キタリ故ニ人民ノ之ヲ購求スル者其度ニ適セズ是目今洋貨ノ価大ニ減ジ或ハ原価ヨリ低キ所以ナリ」(津田真道「貿易権衡論」26号)

[原価] の早い用例である。洋品の輸入は鎖国時代にもオランダ交易で経験しているが，この「交易」という語は，用例文のタイトルが「貿易」になっているように [貿易] が「交易」に取って代わって一般化している。

◆財務

「民選議院ノ事ハ世上ニ公論アリテ其制モ亦略ボ分明ナレハ今贅論セスニハ只其財務ニ預カル要件ノミヲ掲クヘシ」(神田孝平「財政変革ノ説」17号)

中国語に用例なく，日本語でこの例が早い。タイトル中の「財政」は，津田真道訳『泰西国法論』(1865/慶応元年) に見えるという。(註5)

◆宗教

「津田君ハ宇内最良ノ一宗ヲ抜ヒ移シテ之ヲ我邦ノ公教ト為スヲ策トシ西君ハ教政各別ノ理ニ拠リ宗教政府両断シ永ク宗教自由ノ権理ヲ以テ良謨トス余亦以為セク‥‥」(森有礼「教宗」6号)

[宗教] は英語 〈religion〉 の訳語。森有礼は『航魯紀行』(1872／明治5年) でも用いているが，福沢諭吉『学問ノススメ』(明治5年)にも見える。なお，引用文のタイトルが「教宗」となっており，[宗教] とは語順が転倒している。禅宗では，自宗以外の教派の総称として「教宗」を用いた。

◆官権

「更ニ一種卑劣鄙猥ノ風ヲ長ジ商法ニ心ヲヨセ名ヲ欧米ニ仮リ姓名ヲ詐リ官権ヲ隠用シテ金廻シヤラ商売ヤラ商人ト自然狎レ合胆力モ気節モ消耗シテイツノマニカ国家ヲ窮困スル風ニハナキヤ」(坂谷素「政教ノ疑余」25号)

[官権] の早い例である。『明六雑誌』にはこの他「公権」「民権」「私権」なども見えるが，これらの語は中国の古籍や和書に見えるので，次項のB) に分類した。

◆社交

「是則チ人間遮光 (ソシアル) ノ生 (ライフ) ニシテ哲理 (ノイロメフィカル) ノ眼目ヨリ観レハ政府未タ立タサルノ前ニ既ニ人間社交ノ生相ヒ生養スルノ道ハ備ハラサルヲ得スシテ‥‥」(西周「人世三宝説三」40号)

◆社用

「此差ハ報知社ニテ吾社用ニ立替ノ金ヲ差引キ残金‥‥」(森有礼「明六社第一回役員改選ニ付演説」30号)

[社交] [社用] ともこの時期に造られた和製漢語で『明六雑誌』が早い例である。とくに [社交] は西周の造語である可能性が高い。

◆敬語

「然レドモ是等ノミナラスアルヲゴザルト云ヒ座ス申スナト其外種々ノ敬語ナド捨ルニモ捨ラレス取ルニモ取ラレス‥‥」(西周「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」1号)

『明六雑誌』第1号の巻頭をかざる，いわゆるローマ字論の主張であるが，その綴りの様式を示した後に述べている。[敬語] の早い用例である。

◆公衆

「リベラール党ハ務メテ国権ヲ減縮シ務メテ民権ヲ拡張セント欲ス故ニ教育ノコト伝信ノコト郵送ノコト其他総テ公衆ニ係レルコトヲモ悉皆民人ニ委託シテ決シテ政府ヲシテ是等ノコトニ関セシメサルヲ良善トナス」(加藤弘之「福沢先生ノ論ニ

答フ」2号)

[公衆]の早い例である。和製漢語であろう。また，引用の例文中には［伝信］→「電信」，［郵送］→「郵便」，［民人］→「人民」があり，ともに当時は→の後の語と共用されており，近代語の過渡期の様相を見せているといえよう。

◆広告

「然レドモ律法猶旧悪減免ノ例アリ然ルヲ新聞紙ニシテ他人ノ旧悪ヲ記載シテ天下ニ広告ス抑何ンゾ」(津田真道「新聞紙論」20号)

早い例である。W．Lobscheid『英華字典』(前出)，『英和字彙』(前出)ともに〈advertisement〉の訳には「告知・報知」しか見えない。このころの和製漢語であろう。

［A-c］〈精神・身体〉の語彙

回想　確信　決行　所信　恋愛　惰気　痴呆
熱心／筋肉　保健　など

◆回想

「而シテ我国今ヲ距ル事僅ニ十数年前ノ事ヲ回想スレバ各港ヲ開ラキ外国交易ヲ為スコトヲ我国未曾有ノ大患害ナリト思ヒタル人ノミニテ‥‥」(津田真道「内地旅行論」24号)

[回想]の早い例である。今のところこれより古い例は見えず，和製漢語と思われる。

◆所信

「人々其住家屋裏ニ就テ己レカ所信ニ従ヒ壇口棚楼ヲ作リ祈祷祭祀スルハ自在タルヘク家屋外ニ於テハ小口宇ト雖ドモ之ヲ建リヲ禁スヘシ」(西周「教門論二」5号)

中国語の用例はなく，日本語ではこの例と同じ期の福沢諭吉の『学問ノススメ』(前出)が早いようである。『大漢和辞典』は見出し語を立てない。

◆恋愛

「自由恋愛党〈夫婦共時々恋愛スル所ノ恋スルニ随テ縦ニ配偶ヲ改ムルヲ以テ真ノ自由トナセル一党アリ此一党輓近漸ク合衆国ニ起レリ〉」(加藤弘之訳「米国政教」13号)

漢籍からの用例はなく，『日本国語大辞典』は，『明六雑誌』の同人・中村正直の訳書『西国立志編』(1871／明治4年)の用例を挙げている。本誌でも，ここに引用の1語だけである。英語〈love〉の訳語という。明治22年(1889)刊の『言海』に登場する。明治20年代になると用例も多くなる。

◆痴呆

「然ルニ是皆積極ニ属スル者ナリ其消極ニ属スル者ハ愚不肖頑鈍痴呆駿憃等ノ目アリ」(西周「知説」17号)

和製漢語のようである。漢籍の例は見あたらず，中村正直『三箴言』(18??)の用例が早い。〈愚か者〉の意である。現代語との間に意味のずれがある。

◆筋肉

「夫人身ノ病ヲ口スルハ血液筋肉ノ口ニ不平均ノ所アルニ由ル，医タル者其病根ヲ察シ薬ヲ投ジ以テ其不平ヲ調整シテ不均ニ復セシム」(西村茂樹「自由交易論」29号)

『医語類聚』(1872/明治6年)は，〈myotomy〉に［筋肉］を当て，他に「筋肉病」〈cinetica〉，「筋肉論」〈myolin〉，「筋肉素」〈myology〉を挙げている。一方，W. Lobscheid『英華字典』(前出)には「肌・肉筋」が見え語順が転倒している。なお，漢籍には［筋肉］の用例はないようである。

◆保健

「米国保健ノ党起スベク国家有事娘子夫人城無事レハ開物成務育子之業日ニ美ニ月ニ大ナルベシ」(阪谷素「女飾ノ疑」21号)

ここでは「健康を保つ」意で用いられている。早い用例である。

［A-d］その他の語彙

偉大　演技　温度　魅力　各位　確保　確立
汽船　極北　積極　結末　好機　校訂　好例
所出　諸費　拙策　設定　切迫　体験　単一
着目　調整　著者　定立　適任　入費　反映
付言　不全　魅力　面識　洋上　陸上　洋品
洋風　洋服　など

◆温度

「既ニ政府ヲ生気ナリト謂フ乃チ其生気ヲ鼓動スルノ幾那塩無カルヘカラス其ノ政府ニ仕フルノ学者無カルヘカラス既ニ人民ヲ刺衝ト謂フ乃チ刺

緩ヲ適宜スルノ温度無カルヘカラス（西周「非学者職分論」

「‥‥水ノ温度ヲ保有シテ散シテ蒸気トナリ凝テ氷トナルニ至ラサルノ間ハ其体ノ圓々タルヲ推知スヘシ」（西周「知説 22 号）

初めの例の［温度］は，維新改革のエネルギー，情熱といった意味であろう。二つめの例は冷温の度合いの意味である。同じ用法で，福沢諭吉の『文明論之概略』（1875・明治８年）にも見える。一方，中国語での［温度］は確認できない。佐藤亨氏も「『西洋事情』の語彙」の中で［温度］について「日本で訳出された可能性がある」(註6) と述べている。

◆魅力

「亦之ニ依テ其魅力ヲ発ス大凡学者ノ学ヲ勧メ官員ノ官ニ勉強シ工商ノ心力ヲ疲労スル」（阪谷素「狐説ノ広義」20 号）

漢籍に見えず，日本語でもこれより早い例が見つからないようである。

◆各位

「而テ各位人々ノ三宝ハ皆同一ニシテ軽重ノ差等アルコト莫シ」（西周「人世三宝説」40 号）

この頃できた和製漢語か。他に，これより早い用例が見つからない。

◆確保

「私有者ヲシテ職業ヲナサシメ以テ其産ヲ確保スルヲ得無」（杉亨二「人間公共ノ説」18 号）

◆確立

「故ニ其弊ヲ去リ其利ヲ興シ其目的ヲ確立スベキ而已目的確立ノ実厳粛ナレバ学校ノ教ヘ益盛ナリヤスク開明ノ政益行レヤスク‥‥」（阪谷素「民撰議院ヲ立ルニハ先政体ヲ定ムベキノ疑問」13 号）

［確保］［確立］ともに漢籍になく日本語の例もこれより古い用例を見つけることができなかった。この「確」を冠した現代語は多いが，大部分は幕末か明治初期に造られたのではないか。なお検討してみたい。

◆極北

「然ルニ欧羅巴ニ於テハ諾威及ヒ拉巴蘭ノ高山北風ヲ遮ルニ因リ極北ノ国ト雖も其寒気酷烈ナス」箕作麟祥（「人民ノ自由ト土地ノ気候ト互ニ相関スルノ論」4 号）

◆積極

「然ルニ是皆積極ニ属スル者ナリ其消極ニ属スル者ハ愚不肖頑鈍痴呆駿等ノ目アリ」（西周「知説」17 号）

［極北］［積極］ともに中国語の例は見つからない。また，『日本国語大辞典』の例は，2 例ともこの『明六雑誌』を引用している。この「極」を前接，または後接した新しい語が近代になって目立つようである。

◆体験

「是之ヲ日常体験ノ際ニ徴シテ人々能自ラ知る者ナリ」（西周「愛敵論」16 号）

漢籍の用例がない。また，日本語についても新しい用例しかなく，この例が古いもののようである。

◆洋風

「若果シテ此社立ツコトアラハ入社ノ人ハ漢学者流ニテモ国学者流ニテモ又ハ俗人ニテモ皆有志ノ人ニテ洋風ニ向フノ徒タルベシ」（西周「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」1 号）

◆洋服

「故ニ我帝国一般ノ人民モ漸ク洋風ヲ欽慕シ洋帽ヲ冠シ洋服ヲ服シ洋風ノ家室ヲ作り‥‥」（津田真道「貿易権衡論」26 号）

「洋学」「洋書」といった学問の分野だけでなく，「洋品」も「衣服家什ヨリ飲食ノ具ニ至ルマデ欠クベカラザル需要ノ品物」となり，［洋服］はもとより「洋帽」をかぶり「洋風ノ家室ヲ作リ‥‥椅子卓机等諸般ノ什具其酒菓飲食ノ物ニ至ルマデ殆ンド家々輸入ノ品物ヲ用ヒザルナキニ至レリ」という。また，西周は，その創刊号の巻頭で，たびたび引用するように「洋字を以て国語を書するの論」を掲げ，「洋字」すなわちローマ字論を主張し，［洋風］の引用文のように「漢学者流ニテモ国学者流ニテモ又ハ俗人ニテモ皆有志ノ人ニテ洋風ニ向フノ徒タルベシ」と言い切る。

『明六雑誌』発行期の明治７年（1874）ころは，日本が欧化に向けて突き進んでいたこと，西洋の理解がある程度できるようになったいたこと，日本語も前期の中国からの借用に頼るのではなく，自らの手で造語することが中心になる時期に入っていた。西洋，つまり「洋」を冠す語は，この他にも「洋字」「洋上」「洋人」「洋法」などが見える。

以上，大まかであるが，近代以前に日本語にも中国語にも用例の見えない，いわゆる「和製漢語」と考えられる現存語について，とくに引用は『明六雑誌』が早い例と考えられる語を中心に見てきた。

科学用語は，江戸の蘭学時代に，ほぼ整備されていており，この期にはあまり〈新語〉は出てこない。これに対して，一方の文系用語は「権」や「洋」を冠した時代思潮を反映した語を中心に豊富である。そして，これらの語の大部分は，その後中国語，朝鮮語にも輸出されて，今も活用されている。

B）『明六雑誌』期に中国から新たに入った語（近代以前の日本語に用例のない語）

これまで見てきた日本人の手による積極的な造語の他に，とくに幕末から明治初期には中国語からの借用が盛んに行われた。それは，すでに述べたように中国が日本より一足先に洋学を取り入れ，英書の翻訳や英華辞典の作成が先行していたことによる。

日本人の関心は中国語に訳された英書を訓読すること，また「英和辞典」ができるまでは「英華辞典」を利用した。間接的ではあるが，こうした方法で西洋理解に努めた。この期間は，日本人が英語に精通するまでを含めると約20年間ある。この間に，中国洋学の新語，また中国には古くからあった語でも日本人には初めてという漢語が多くもたらされた。

『明六雑誌』にも，そうした語彙が多く含まれており，本稿ではそれらの語も〈新語〉として扱った。《表3》に，B）項として示した語がそれで1,352語ある。〈新語〉として扱った語の44.5%を占めている。このうち，957語（71%）が現在も使われており，この中から『明六雑誌』が早い用例と思われる語を中心に検討する。

［B-a］〈学術・政治・法律〉に関する語彙

緯度　化学　学説　学科　洋学　洋書　演繹
帰納　学説　学科　客観　推論　空気　時間
蒸気　電気　摩擦　地質／外交　議案　議員
議院　議会　議事　議長　行政　民政　軍備
決議　国会　自治　政論　統治　代議　内閣
内政　文部　領事　両院／法学　控訴　公法
司法　民法　商法　酒税　審問　税法　罷免
民事　無税　など

◆緯度

「緯度ニ因テ其類ヲ異ニス智者アリト雖赤道ノ草木禽獣ヲ移シテ之ヲ北極の地ニ蕃息セシムルコトヲ得ズ」（津田真道「運送論」9号）

中国洋学書『大美聯邦志略』（1861年重版）に見える。ただし，この語，中国の古籍に「大きな度量」の意味で使われており，これを英語の翻訳で「経度」に対応させて転用した。『大美聯邦志略』は1861年（文久元年）に箕作阮甫によって訓訳され和刻本になっている。西周『百学連環』（前出）が［緯度］の日本での早い用例である。

◆洋学

「方今ノ急務ハ国学漢学洋学ノ差別ナク唯国民ヲシテ一人モ多ク学問ニ志サシムルニ在リ」（西村茂樹1号）

「西洋」つまり「洋」を冠した語がこの時期になると学術用語だけでなく，一般の語にも多く見られるようになる。ローマ字を「洋字」とい，西洋からの輸入書を「洋書」という。

◆演繹

「学者臭ク演繹ダノ天文ダノト云ハストモ知レタコトデ併シ其処ニハ色々ナ関係カ有ッテソウ御正論通リニハ行カヌコトダ」（西周「内地旅行」23号）

◆帰納

「ソコテ学者論ニナラヌ様ニ一層利害ニ切ナ様ニ帰納ノ方法デ論シテ見マセウ」（西周「内地旅行」23号）

「演繹」の方は，中国の古籍『朱熹』に意味が違うが出てくる。ただし「帰納」に対応する用例はない。日本の例では，西周の『百学連環』（前出）に〈deduction〉の訳語として見える。「帰納」については中国語の用例はなく〈induction〉の訳語といわれる。

◆国会

「国会ノ公議ニ於テ選王ノ事ニ係ル者ハ峨国其議ヲ管理シ又国中ニ於テ党与ヲ募テ之ヲ保護ス」（杉亨二「峨国彼得王ノ遺訓」3号）

中国の古籍に「国家の会計」の意で見える。現在の「立法機関」の意の用例は，中国洋学書『大美聯邦志略』(前出) に登場する。中国で英語の翻訳に際して既存語から意味の転用により用いたものと考えられる。『大美聯邦志略』(前出) は，箕作阮甫により訓訳 (1862/ 文久 2 年) された。

◆内閣

「此時ニ至テ縉紳華族或ハ上院ヲ興シ或ハ廊堂ニ昇リ内閣ニ座シ屹然トシテ国家ノ柱石ト為リ」(津田真道「政論」12 号)

中国で古く，部屋の名，役所の名，官名に用いた。これを日本で英語〈cabinet〉の訳語として採用した。意味の転用の例である。ここでは〈部屋の名〉の意味であろう。現在の「内閣総理」の意で一般に使われるのは明治 10 年代になる。『明六雑誌』でも，この一例のみである。

◆控訴

「罪人一度処刑ノ行告ヲ受ケタル後其罪ニ服セザル所アレハ某々時源内限内ニ於テ更ニ上等裁判所ニ控訴スルコトヲ得ベシ」(津田真道「拷問論」10 号)

近代になって中国語から入った語である。『日本国語大辞典』は『改正増補和英語林集成』(1886/ 明治 19 年) を用例として挙げている。『明六雑誌』の方が早い。「民事訴訟法」(1890/ 明治 23 年) の用語として採用されている。

◆民法

「縦令絶テ拷訊ヲ用フル無キモ匹夫賤劣威厳ニ伏シ心胆転倒其理ヲ伸フルコト夫ノ民法ノ訟庭ニ於テ原被告人互ニ其権利ヲ主張スル」(津田真道「拷問論」7 号)

「民法」は中国語に見えない。津田真道の訳書『泰西国法論』(前出) が早い例である。法律用語は多くは中国語からの借用語が多い。古い時代に律令制度を入れたためであろう。たとえば「憲法」は，中国の古籍『国語』『管子』などに見える。たた，意味は〈国家のおきて，国法〉で，日本語でも同じ意味で『続日本紀』『令義解』などの用例がある。現代の意味での用いられるようになったのは，日本語では明治初期からである。

[B-b]〈経済・社会〉に関する語彙

国債　元金　銀行　月給　歳入　歳出　財政
紙幣　造幣　出資　消費　貯金　抵当　統計
納税　輸出　流通　廉価／権利　権力　公権
国権　主権　人権　民権　回教　海軍　解放
管理　家系　制圧　制限　規定　義務　警察
巡査　教会　協同　言語　公共　公布　束縛
事件　視察　社会　集合　衆論　私立　信教
新聞　懲役　統制　風潮　平和　民生　郵便
連邦　など

◆国債

「明治六年ニテハ又輸入ノ数輸出ヨリ多キコト概略七百万円ナリト云フ之ニ加フルニ院省使府県並ニ平民雇フ外国教師ノ給料概スルニ二百万円国債ノ利子若干万円‥‥」(津田真道「保護税ヲ非トスル説」5 号)

中国洋学書『六合叢談』(前出) に見えるという。新しく入った語である。

◆元金

「外人ニ元金ヲ借テ商売スル者アルハ茶碗ノカケラヲ見るルガ如シ」(福沢諭吉「内地旅行西先生ノ説ヲ駁ス」26 号)

「もとで」から「もときん」，そして「ガンキン (元金)」へ。この訓読 (和語) から音読 (漢語) への読み替えによる漢語の造語法は，たとえば「でばる (出張る)」から「出張 (ひっちょう)」への読み替えなどにも見られ，近代語の造語法の一形式として活用された。

中国語の用例が見えない。また，日本語の例も『日本国語大辞典』は，この『明六雑誌』の文を引用している。

◆銀行

「若シ之レヲ用ヒハ数年ヲ歴ズシテ国債悉ク消除セント政府之ヲ容ルスロウ乃チ銀行ヲ立テ社ニ入ル者ニハ商利ニ随テ‥‥」(杉亨二「空商ノ事ヲ記ス」8 号)

中国の古籍に「両替屋」の意味で見えるが，中国の洋学書『大美聯邦志略』(前出) にも見えて，これが幕末に訓読されて日本に入り一般化したものと考えられる。なお，佐藤論文に詳しい考証がある。(註6)

◆歳入／歳出

「代議士又歳入歳出等ヲ始トシテ国家ノ大事ヲ監督スル権ヲ有スベシ」（津田真道「政論」12号）

ともに，この2語も中国の古籍に今日とほぼ同じ意味での用例があり，中国洋学書の『泰西国法論』（前出）に見えるという。日本語では福沢諭吉『西洋事情』（前出）が早い例である。佐藤論文が詳しい。(註8)

◆財政

「国家困窮ニシテ人民蒙昧ナレハ空計之ニ乗シテ入ル仏王路易第十四死ス国債十億リブル（凡ソ我六億円）ヲ遺シテ之ヲ人民ニ負セ財政大ニ紊乱セリ」（杉亨二「空商ノ事ヲ記ス」8号）

［財政］の引用文中に「空計」という語が見える。また，この引用文のタイトルにもなっている。「空計」は〈現実性のない計画〉の意で用いられているが，現在では『日本国語大辞典』が登録している。

◆貯金

「然レドモ其貯金ノ用法未タ定ラス今ノ勢ニテハ此貯金毎日五十余円ヲ得ルニ由リ‥‥」（明六社第1年回役員改選ニ付演説」30号）

［貯金］を〈金を貯える〉意で中国語には古くからある。日本語では，この例が早いようである。踏み込んだ検討が必要である。

◆抵当

「欧米各国書入質役所の設アリ不動産ヲ抵当トシテ金ヲ借ルニ‥‥」（津田真道「政論」16号）

中国語では①〈担保・質ぐさ〉②〈抵抗〉の意で古くからあるが，日本語で①の用法で現れるのは西周の『百一新論』（前出）と，この『明六雑誌』の例が早い。

◆統計

「代議士ノ数ハ我大日本帝国統計人口三千万ノ中ヨリ六十名乃至百二十名ヲ選挙スベシ」（津田真道「政論」12号）

中国洋学書『西学考略』（1883年）『聯邦志略』（前出）他にもに見える。『哲学字彙』（1881/明治14年）は〈totality〉に当てている。

◆警察／巡査

「道路橋梁警察治水堤防ノ諸費ヲ民間ヨリ出サヽルベカラズ学校建設保持ノ法ヲ立テ其費用ヲ出サヽルベカラズ」（西村茂樹「転換説」43号）

「然ドモ諸ヲ悪少鬼ヲ蔑シ神ヲ無シ酒色惟耽リ賭博惟淫シ巡査ナラサレハ以テ懼ルルニ足ラストスル者ニ比スレハ孰レカ人間ニ近シトスル」（西周「教門論」12号）

2語ともに「太政官公布」（1872/明治5年）に際して日本に入ったものと思われる。［警察］は〈戒め調べる〉意で，〈巡査〉は〈巡り調べる〉意で中国語に古くから見える。

◆教会

「‥‥米国ノ制度タル実ニ祭政ヲ分裂シ政教ヲ解離シ而シテ政府ト教会トヲ以テ各独相関セサル者ト定ムル所以ヲ論述シ‥‥」（加藤弘之「米国政教」5号）

中国洋学書『大美聯邦誌略』（前出）の訓訳によって日本語にもたらされたものと思われる。この例が早いものである。

◆社会

「乃チ民間志気ノ振フナリ社会ノ立ツナリ」（西周「非学者職分論」2号）

中国語にこの［社会］の語は古くから存在するが〈社の会合〉とか〈地域の組合〉の意の用法である。今日，現代語して使われているのは，福地源一郎が『輿地誌略』（1875/明治5年）で英語〈society〉の訳語として用いてからの意味で〈人間が構成する集団生活の総称〉とされる。このことから［社会］は和製漢語といわれ，中国の『漢語外来詞詞典』（1984年・上海）もこの和製漢語説を踏襲している。ただ，1960（文久元年）に箕作阮甫が訓訳した中国洋学の地理書『地球説略』にも［社会］が見える。和製漢語というより，中国語からの転用ということになる。この引用の例も現代語の用法である。

◆郵便

「海陸軍制及ヒ文部ノ学制主トシテ洋法ニ倣ラヒ工部郵便電信鉄道灯台ヲ設施シ外務国使領事ヲ各国ニ派遣シ司法徐々ニ裁判所ヲ各地ニ設置シ‥‥」（津田真道「政論」11号）

◆福祉

「邦国ハ人主一人ノ産業ニアラズ所謂天下ハ天下ノ天下ニシテ一人ノ天下ニアラザルモノナリユヘニ人民ノ産業ヲ保護シ危難ノ事ヲ防キ利用厚生ノ道ヲ通シ人民ヲシテ安寧ヲ得福祉ヲ受シムルハ

人主ノ職分ナリ」（中村正直「西学一班」12号）

中国語では〈幸い〉〈幸せ〉の意で古くからある。日本の現代語でも意味にそれほど差異はないと思われるが，日本語に［福祉］が登場するのは明治に入ってからのようである。中村正直の訳書『西国立志編』に見える。なお，引用文中の「産業」は今日の「財産」に当たると思われる。

［B-c］〈精神・身体・生産物〉の語彙

意義　意識　永遠　感化　客観　主観　自主
信教　教化　教養　功利　私見　実践　質問
私有　心性　心理　沸騰　責任　相愛　対峙
独立　認識　反対　表明　奮起　目的　本性
離婚／血液　健康　体力／印刷　印紙　生産
建築　工場　鉄道　鉄路　電機　電信　電線
電報　など

◆主観／客観

「‥‥三ツアリ曰ク才曰ク能曰ク識才ハ智ノ渉ル所客観ニ属シ一部ノ中ニ就テ精ヨリ精ニ及フ者ナリ故ニ才ニ大小アリト雖ドモ多クハ局ス譬ヘハ詩才文才書画ノ才ノ如シ能ハ智ノ渉ル所主観ニ属シ必ス精ニ及ハス能其類ニ及フ者ナリ」（西周「知説」14号）

中国語に［主観］は見えず，英語〈subject〉の訳語という。和製漢語ということになる。『日本国語大辞典』は，その初出を『哲学字彙』（1881/明治14年）とするが，上記の引用例で明らかなように『明六雑誌』にすでに見える。ところで，この［主観］と対応する「客観」は，中国語に〈外観・容貌〉の意で古籍に見えるが，［主観］に対応する用法はない。

◆自主

「故ニカヲ尽シテ人民自由自主ノ説ヲ主張シテ喩ヘ政府ノ命ト雖無理ナルコトハ之ヲ拒ム権アルコトヲ知ラシメ自主自由ノ気象ヲ我人民ニ陶鋳スルハ我輩ノ大ニ望ム所ナリ」（津田真道「学者職分論ノ評」2号）

中国明代の洋学書『西学凡』（1623年）に〈天主〉の対義語として出てくるようであるが，その後『大美聯邦志略』（前出）には，今日の日本語の意味〈他からの干渉を受けず独立しておこなうこと〉で使われている。『大美聯邦志略』の訓訳をとおして日本語に入ったものと考えられる。

◆心理

「然ルニ物理ノ如キハ証左見易ク心理ノ如キハ証左知リ難シ」（津田真道「想像論」13号）

「心理」には①〈心と理〉②〈心の働き〉の二様があるが，ともに中国の古籍に見える。日本語では西周の『百一新論』（1874/明治7年）に②の意味で登場するのが早い。上記の例と同時期である。なお，西周には翌明治8年に『心理学』という書名の訳書がある。

◆沸騰

「元来仏朗西諸国ニ在リテハ処士横議民論沸騰政府頗ル統御ニ苦シム」（津田真道「出板自由ナランコトヲ望ム論」6号）

中国の古籍に①〈起こりたつ〉②〈沸きたつ〉の意味で見える。日本語にこの語が登場するのは近代になってからのようである。ここでは①の例であるが早い用例である。

◆健康

「英国ノ法律ニ人民ノ権理ヲ分チテ三綱トス其一ハ人民己ガ実保護スルノ権理ニトテ凡ソ英国ノ民ハ皆己ガ性命四肢形体健康面目ヲセザルノ権アリ」（西村茂樹「自主自由解」37号）

［健康］も中国語には見えないようである。日本語の用例では，福沢諭吉の『西洋事情』（1866~1869/慶応2～明治2年）が早い。『医語類聚』（前出）は〈eueyis/sanity〉に，『英和字彙』（前出）は〈health〉に［健康］を当てているが，『英華字典』は〈health〉に「康健」を当て語順が転倒している。

◆建築

「是其鉄道電信灯台造兵造幣主船等諸般ノ新興作ヲ為シ諸省府県建築ノ業石橋大路瓦斯燈ノ設陸続トシテ作リ‥‥」（津田真道「貿易権衡論」26号）

今日の［建築］の意味には，一般に「建造・造営」が用いられていたようである。箕作阮甫の訳書『玉石志林』（1855頃／安政2年）に［建築］が見えるという。中国語の用例はなく，日本で造語したもののようである。

◆電報

「然ドモ文章談話共ニ前後照応アリ必一語ニシ

テ止マラズ夫ノ電報ノ如キ簡易ノ文，約略ノ語尚能ク通ズ」（清水卯三郎「平仮名ノ説」7号）

この語も中国語の方が早いようである。通信技術の歴史からみて，日本の幕末期の造語であろう。日本語では，明治5年の新聞記事に見える。

［B-d］その他の語彙

維新	革新	確実	確定	完成	基礎	強力
極論	屈折	啓示	軽視	結合	欠乏	限界
広義	合計	交換	交互	合同	号令	国外
謝金	常用	書籍	神人	生育	正確	請求
成語	精算	生存	整理	説明	専権	戦時
前進	専任	全廃	染料	造成	創立	貸借
代理	治水	地方	着眼	注意	陳述	店頭
同一	統括	逃避	読者	図書	日誌	判定
派出	発熱	万有	比較	百貨	標識	風刺
侮辱	物質	防火	不服	部分	文才	文弱
平凡	弁解	編者	方向	報知	牧畜	保持
本質	無害	名簿	訳本	有害	遊戯	有職
有望	遊牧	有利	要件	要職	養老	立論
隣人	論題	論理	など			

◆維新

「夫維新以来賢材モ排出シ百度モ更張シ管省寮司ヨリ六十余県ニ至ルマテ既ニ昔日ノ日本ニ非ス」（西周「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」1号）

ここで用いられている［維新］は「明治維新」の意である。中国語にも［維新］の語があり，この方は〈全てが改まり新しくなること〉である。『書経』に見えるというから，当然，近代以前に日本に入っていたはずである。こうした語彙は，これまでみてきた語にも含まれている。つまり，用例がないということは〈了解語彙〉であっても〈使用語彙〉ではないということであろう。

◆確実

「但清人ノ考証西洋近今確実窮理ノ学想像ヲ用フルコト寡シトス」（津田真道「想像論」13号）

◆啓示

「コレヨリ以前ハ倫常ノ道ヲ講ズルコト経典ニ拘泥シ上帝啓示ノ明文ナキコトハ異端ト為シテ采ラザリシナリ」（中村正直「西学一班」11号）

〈神の啓示〉というような用法は中国語が先のようである。この語が日本語に見えるのは中村正直の『西国立志編』（前出）であるが，ここでは〈よく分かるように示す〉といったような意味である。引用の例は中国語の用法の範疇であろう。

◆生存

「情欲ハ吾人天賦ノ尤重切ナル者ニシテ吾人ノ因テ以テ生存スル所以ナリ」（津田真道「情欲論」34号）

中国語では『易経』の用例を挙げている。日本語にこの語が入るのは，この用例が早い。

◆陳述

「仍テ先ツ諸君ヘ開会以来事歴ノ大略ヲ陳述シ又社ノ昌栄ヲ祝シ兼テ諸君寛厚ノ友待つ懇切ノ情誼ヲ謝シ‥‥」（森有礼「明六社第一年回役員改選ニ付演説」30号）

この語も〈述べる〉意で，中国では早くから見える。日本語では新聞記事に明治4年（1871）に見えるのが早い。引用の例は〈演説〉であるので，この時期になると改まった場面では話しことばとしても用いたようである。

◆風刺

「今一歩ヲ勧メ猥雑ニ流レス時情ニ潤ラス滑稽ノ中ニ風刺ヲ寓シ時弊ヲ譏諫スルコトナトアラハ世ノ益トナルコト亦少ナカラス」（神田孝平「国楽ヲ振興スヘキノ説」18号）

◆平凡

「故ニ極メテ平凡極メテ尋常ナル説ヲ陳シテ以テ高明ノ諸君子ニ就正ス」（中村正直「人民ノ性質ヲ改造スル説・演説」30号）

［風刺］［平凡］ともに，ここでの引用が早い例である。一方の中国語では早くから用例が見える。

◆論理

「夫レ第加児的（デカルテス）ノフーイジクスニ於ル（天地万物体質ノ学）霍畢士（ホツピス）ノモーラルス（倫常ノ理学）ニ於ル論理精明ナリ」（中村正直「西学一班」12号）

中国語では〈筋みち〉の意で古くから見えるが，現代日本語の〈議論の筋みち〉の古い用例は中国語には見えないようである。この引用例が早いものである。

ここでは，近代になって新たに中国語より入っ

た語を〈新語〉と認定して『明六雑誌』が早い例と思われる語を中心に引用文を見ながら検討してきた。先のA）項の「和製漢語」に比べ，「現存語」に限ってみれば数的にはA）項430語対B）項957語と2倍以上あり，また「廃語」を両者で比べると，A）の「和製漢語」は54.0%と半数以上が廃語になっているのに対し，B）の「中国語から新たに入った語」は71.0%も現存している。語彙の内容も，政治，社会に関する語を中心に注目される語が多い。

ここで「中国語から新たに入った語」の認定についてふれておきたい。一つは，中国洋学から入った語で，この語は日本語には初めての語である。（[銀行] [教会] など）二つには，以前から日本語に入っていても日本語の文に用例のない語である。この語は，そのまま受け入れることもあるが（[維新] など），意味を新たに加えるか，対象を広げて用いる〈意味の転用・拡大〉の例が多い。たとえば「運動」は①天体の運行の意で蘭学時代に入った。②近代になって体操やスポーツなどの身体の運動に意味が拡大された。③選挙運動の例で，さらに意味が拡大されたもので戦後の用法であろう。（[国会] など）

《註》

1）高野繁男・日向敏彦　監修編集『明六雑誌語彙総索引』(1989/平成10年)付復刻版『明六雑誌』大空社
2）国立国語研究所『現代雑誌九十種の用字・用語（3冊)』(1800) 秀英社
3）森岡健二著『近代語の成立』(1969/昭和44年) 明治書院 P7
4）〈新語〉〈既存語〉の認定は下記によった。『日本国語大辞典』(小学館)『大漢和辞典』(大修館書店)／森岡健二『改訂近代語の成立』(1991/平成3年) 明治書院／佐藤喜代治『国語語彙の歴史的研究』(1900/昭和00年) 明治書院／佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』(1986/昭和61年)
5）佐藤亨『幕末・明治初期の語彙の研究』p387
6）〈註〉5同書 P424
7）〈註〉5同書 P90
8）〈註〉5同書 P265

Vocabulary of *Meiroku-zasshi*

—— with reference to two-letter compounds of Chinese morphemes(1) ——

TAKANO Shigeo

The Vocabulary of Japanese language enriched drastically during the period from late Edo to early Meiji. In order to build a modernized country, Japan needed to prepare new words to translate many books and documents mainly written in English.

In this paper I use *Meiroku-zasshi* magazine(1874-75) as basic data and try to describe some important features of Japanese vocabulary in early Meiji period. On this *Meiroku-zasshi* magazine Japanese intellectuals of this period published their opinions based on their comprehension of western thought. Many new words of new concept for modernization and westernization come out in this magazine. Production way of these new words can be divided into two kinds. First Japanese themselves made new words. Second Japan got the loan of words from China who had already translated many books of Western countries into Chinese language. Naturally those loan words are compounds of Chinese morphemes, but the new words which Japanese made for themselves are also compounds of Chinese morphemes, not compounds of Japanese morphemes.

I divide this paper into two parts. This is the first part and research on two-letter compounds of Chinese morphemes that are added to Japanese vocabulary in this period of early Meiji and used still now.

キーワード　明六雑誌　漢語　既存語